

震災障害者の「集い」から、今思うこと

NPO 法人「よろず相談室」
理事長 牧 秀一

皆さん

毎月1度集まっている「震災障害者の集い」は、3月で5年目を迎えます。この間、一貫して「集い」は、「物取りの場」ではなく「癒しの場」となってきました。参加される人もジワジワ増えてきていますが、皆さん何か取ってやろうとの気持ちはゼロです。

15年間も放ったらかしにされてきた人々が、今求めているのは、

「震災で障害者となった私たちのことを認めてほしい」

「集いの参加者は、全体の1%未満。もっと多くの人と出会いたい」

「私たちの苦労を、次の災害で障害を持つ人に味わわせたくない。教訓を伝えたい」

「人と防災未来センターに私たちのように障害を持った人がいるのだとハッキリと展示してほしい」

「災害弔慰金の見舞金は障害を負った人の多くに渡してほしい」などです。

「集い」に集まる人が多くなれば、社会運動に舵を取ろうとする人も出てくるのでは…、と心配されるようですが、先日のNPOとしての初めての理事会（当事者3名、支援者3名）での話で、参加されたい人がいた場合、まず会いに行きましょう、ということが決まりました。趣旨を説明し、参加していただくと思っています。また、参加したくとも来れない人には、ICレコーダーでの声の「文通」や訪問活動なども考えています。

行政への怒りはみんな持っていますが、それは「15年間放置」ということが、原因です。当事者の皆さん、弔慰金の引き上げを求めているのではなく、今なお置き去りにされている多数の人のことを心配しています。そして、次なる災害への教訓を伝えたいと願っています。

みなさん、診断書の原因欄に「災害」を入れることは当たり前のことだと思っています。原因欄に「震災」「1・17」の記載さえあれば、阪神淡路大震災のように行政が「認める人」と「認めない人」という差は生まれません。

震災障害者として認知されないことは、当事者間の差別や、私は見捨てられているとの失望感だけが生まれるのです。

- ① 寝たきりの1種1級の人があります。1週間で12人のヘルパーさんの世話になるものの症状は徐々に悪化しています。（全壊・タンスの下敷き・5時間後救出）
- ② 車いすで復興住宅に住む（被災者だということ）人があります。彼女は「集い」に年末にはじめて来ました。移動は介護タクシー（高い!）。近くの人の親切

で移動できましたが…。(全壊・2階の下敷き・両下肢全廃)

- ③ 子どもを失い、自らが片足切断になった人がいます。(全壊・下敷き)
- ④ 役者を目指していたものの、震災で障害を負い、現在、USJで裏方さんをしている青年がいます。震災後、大阪で生活しています。(クラッシュ症候群)

この4名の方は兵庫県が発表した328名に入っていないのです。最も悔しいのは、当事者です。今回の調査対象者となっていないことの悔しさです。

私は、これら当事者の声を聞き続けようと思っています。そこから、今も何が必要で、当時何が必要であったのかが見えてくると思うのです。4年間続けてきましたが、当事者の願いはなにも突飛なことではありません。誰かが脱落するような主張もありません。

私ごとですが、20年前に現在の夜間高校に転勤してきました。そこには多くの知的障害者と数名の車いすの生徒がいました。正直、一歩引きましたが、その多くが母子家庭でした。親に「先生、私たちの話し聞いて…」から始まり、「鬱陶しい話しせんとスナックへ飲みに行こう」とカラオケ歌いながら、親がここまでどのように育ててきたのかそのしんどさを聞くことで、障害者を持つことの世間の目を知りました。

知的障害の子を持つ親は「私は子どもと手をつないで、三ノ宮を普通に歩きたいのです。今は、子どもを化け物を見る目で見られます。特に信号待ちしている時に…」
自閉症の子を持つ親は「私は、お花の先生が、ヒノキはいろいろ使い道があります。曲がりくねっているマツは、使い道がありません。でも心を癒してくれるのよ、とってくれました。この言葉を支えに生きています」
私は、この二人の親の言葉を忘れることがありません。

障害者の人たちや親たちは、震災障害者に対してではなく、障害者施策の貧困に腹を立てているのです。彼らが危惧していることは、「震災障害者」特有の施策のみが成立し、貧困な障害者施策は何も変わらない、むしろ放置されることの危機感なのです。

9年前から、兵庫県内の夜間高校に在籍する障害者の卒業後の進路保障を目指してきました。知的障害Aの生徒や自閉症知的障害B1の生徒など、現在までに23名を就職させてきました。なにより親や子どもにとって先輩の就労は「夢であり希望」なのです。

震災障害者のYさんは高次脳機能障害。ピアノの下敷きとなりました。企業実習(実習は社会の刺激を受けること。社会の刺激は障害者を変える力を持っています)や企業の特例子会社で雇用を目指した実習にアタックしました。(残念ながら、障害の特徴である怒りと持続力の低下が、じゃまをし、いまだ雇用には至っていません。それでも今も週1回、通っています。)企業は今も雇用への道を考えてくれていま

す)。Bさんの子どもは今年、支援校の2年生になります。両親の願いは、お嫁さんになれること。就労は、支援校では難しいので私が、何とか社会の一員になれるように動こうと考えています。

私は、「震災」という原因で障害を負った人々に、既存の障害者施策の中で埋められない支援をすべきだと思っています。ただ、ずっと「震災障害者」としての支援を受け続けるべきではないだろうとも考えています。

震災で中途障害となり、苦しい日々を過ごす人々が、前向きに生きることが出来るようになれば、(行政や周りの人たちの支援が必要不可欠ですが) その時、はじめて障害者として生きていく必要があるのではないかと考えています。

いくらお金をもらっても、中途障害者(失った腕は戻らない)として障害をずっと抱えて生きていかねばなりません。長い時間がかかるし、大変でしょうが障害を抱えて生きること前向きになれた時、大卒は既存の施策で頑張っていく必要があると、私は思うのです。このことは、当事者の方も「そういうことです」と言われていました。

阪神淡路大震災の場合、みんな彼らの存在やしんどさを忘れてきました。ポチポチ分かり始めたのは、4年前のことです。すでに震災から12年が経過していたのです。

多数の死者の影に隠れ、震災で障害を負った苦しさや辛さを言うことが出来なかったのです。震災当初から「生きてるだけまし」と言われ、思われ、見られ、忘れ去られてきたのです。悔しい思いを10年以上抱えながら生きてきたのです。

今回の兵庫県・神戸市の実態調査を見ても、相談できる人が「家族」75%「誰にも相談できない」10%という結果が出ました。悩みを聞いてもらえる友達や近隣の人がいないのです。

私は、「忘れられてきた」「生きてるだけまし」ということが、阪神大震災で障害者となった人々の一番辛い共通項であり、一番の特徴ではないかと思うのです。もう二度とこのような辛い思いをさせてはならないと思うのです。このことを、教訓として伝えなければならないと考えています。

CさんもDさんもFさんも「集い」に参加している人の多くは、「震災とまだ言うてんのか」「いつまで言うてんのや」と言われてきました。ある震災障害者は、報道された時、身内から怒鳴られ地域の人からジロツと見られるようになり、「集い」に來れなくなりました。狭い社会です。

当事者と支援者が「集い」を通して考えている施策は、ほぼ次のようなものです。

- ① 震災障害者の実数を把握すること。阪神大震災のように「孤立無援の人生」を送ることのないように。今なお孤立している人の掘り起こしも進める。
- ② 総合窓口の設置← 本人・家族が今後の生活のあり方、悩みごとなど相談でき

- る窓口。
- ③ 当事者と一緒に生活上のことを考え、行政の窓口になる専任担当者の配置
 - ④ 二つの集い→ i : 当事者・家族
ii : 当事者・家族以外に、医療や教育関係者など支援者との集い
 - ⑤ 人と防災未来センターに震災障害者のコーナーをつくる
 - ⑥ 災害障害者見舞金（1回きりなら意味がない。意味があるとすれば、忘れていませんよ。これからお手伝いしますから頑張ってくださいとの行政からのメッセージとしての見舞金。「大変だったですね」という言葉があれば、今のように苦しまなかったと家族は言ってました。）を現行より多くの人に手渡せるようにする。→1級を手帳所得者全員に、身体障害だけではなく知的・精神も含める
 - ⑦ 生活保障。自宅全壊、仕事に就けない、医療費、介護タクシーの費用など生活を立て直し、生きていくために必要な継続的支援。→既存の施策+α
 - ⑧ 震災障害者の施策は、各自が前向きに生きることが出来るまで続ける。例えば10年間程度。